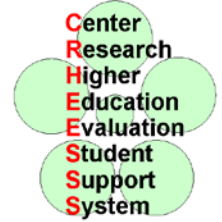


週刊センターニュース No.229



第229号(2008年10月17日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○共同学習会のご案内 ○●○

第202回

日時: 10月23日(木) 16時半~18時

会場: 角間キャンパス総合教育1号館2階大会議室

発表者: 鎌田 康裕・末本 哲雄 (FD・ICT教育推進室)

テーマ: 「インストラクショナルデザインについて」

概要: 8月に行われたインストラクショナルデザイン(略してID)のセミナー及びワークショップに参加した。IDの内容と、実際にIDをどう取り入れていくかについて、カリキュラムの見直しや教材開発という視点も踏まえながら紹介をしたい。

第203回 及び 平成20年度SD研修会

日時: 10月28日(火) 10時~11時40分(曜日・時間及び会場が通常と異なります。ご注意ください)

会場: 角間キャンパス: 総合教育棟2号館D10講義室(5階)、鶴間キャンパス: 保健学類5号館5104教室(1階)(双方向遠隔授業システムを利用し、両キャンパスを結んで実施)

発表者: 堀井祐介(大学教育開発・支援センター)、田邊喜章(角間北地区事務部学生課)、浦志都(角間北地区事務部学生課学務第一係)

テーマ: 「学士課程教育の構成と体系化~第27回教育研究公開シンポジウムへの参加報告~」

概要: 平成20年8月30日に文部科学省講堂にて開催された第27回教育研究公開シンポジウム「学士課程教育の構成と体系化」の内容を報告するとともに、中央教育審議会における学士課程教育についての議論を踏まえた学士課程教育の全体像について考える

○●○ ファカルティ・ディベロッパー入門講座 参加報告 ○●○

2008年9月10~11日にキャンパス・イノベーションセンター東京にて愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室主催のファカルティ・ディベロッパー入門講座が実施された。この講座は、「初めてFDを担当することになった教職員(ファカルティ・ディベロッパー)が職場で効果的なFDプログラムを実施するために必要な知識と技能を身につける」ことを目的とした2日間のプログラムである。本講座の講師を愛媛大学の佐藤浩章先生、小林直人先生、野本ひさ先生が担当され、著者を含め計59名の参加者がセッションI「FD概論」、セッションII「FDプログラムの開発・体系化」を通してファカルティ・ディベロッパーとしての基本を学んだ。

① ファカルティ・ディベロッパーに必要な専門性

セッションI「FD概論」では、FDの定義・歴史、必要性和問題点などを再確認した。

筆者が特に関心を持ったのは「FD(現在の一般的定義は、教員が授業内容、方法を改善し、向上させるための組織的な取り組み)を進めるにあたり、FD担当者にはどのような専門性が必要なのだろうか?」という問いであった。佐藤先生は以下の項目を提示された。

【知識】①学習心理学、②成人教育論、③インストラクショナルデザイン、
④組織論、⑤調査論、⑥高等教育学

【技能】①インストラクショナルスキル、②コンサルティングスキル、
③ファシリテーションスキル（会議などでの議事進行、議論促進技法）、
④教材開発力、⑤チームワーク力、

【態度】①ニート（NEAT：身なり、言動の丁寧さ）、②誠実さ、③前向きさ、④社交性、⑤ストレス耐性^神、⑥ホスピタリティ（おもてなしの精神）

（補足：ストレス耐性の説明にて「いくら大盛況だった FD 研修を行っても、『トップダウンだから・・・とか、この研修には意味がないとか、準備不足だ』という感想が必ず数%はやってくる。いちいちめげてはいけない。また、めげる必要もない。みんな傷ついている」との発言に、会場一同から苦笑いと共感の雰囲気が生じた）

上記に示した項目は1人で全て備える必要はなく、「補い合えるチームを組めばいい」とのこと。もちろん、これらの項目はFD担当者の素養であり、教育効果を上げるための道具箱と捉えるべきものだが、この一覧の提示はFD担当者の役割を理解する上で非常に参考となった。

② FDプログラムの開発・体系化

セッションⅡ「プログラムの体系化」では、参加者が各人あるいはチームとして実際にFDプログラムの企画を作り上げる活動を行った。例えば、先生に新しい授業形態を紹介・体験してもらう研修やICTを学内に普及させる試み、学部のFD関連活動のマップ化などの作成。ちなみに著者は「Project Based Learning 型授業の導入」という授業形態の紹介する2日間にわたる研修を企画した。（紙面の関係上、著者の企画内容については割愛する）

企画作成の過程は以下の通りである。

- (1) 現状の問題点を付箋に書き出し、グループ化。FDの対象とするテーマを選定
- (2) テーマより目的・目標、評価方法、研修技法、日時・場所、講師の選定し、プログラムを決定
- (3) 開講式、オリエンテーション、アイスブレイクでのFD担当者としての振る舞い方を記述（お菓子の配布時期も考慮に入れた）
- (4) できるだけ簡潔で、“参加したくなる”実施要項ポスターを作成
- (5) 参加者がお互いの募集要項を見て、コメントをシェア

最後に、実行可能性という観点から感想を述べてみたい。

愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室が主催する「ファカルティ・ディベロッパー入門講座」（要するに本講座）と私の仮想的な募集要項を比較してみたところ、前者は、**考える時間の確保された時間配分**がなされていた。著者が作成した研修のタイムテーブルは（他の研修者も含め）、かなり凝集された時間配分となってしまった。これでは、プログラムをこなすこと自体が目的となりそうな研修となり、先生方にただFD活動に参加したという安心感を与えるだけの企画に終わってしまう。効果的な研修を考えた場合、考えを練る時間の確保とその仕掛け（アイスブレイキングなど）は非常に重要だと感じた。

本講座で高評価を得た企画のひとつに“障害者用の点字をつくるFD研修”があった。「点字を作るという**すぐにできる簡単な活動**が障害者の立場を理解し、より優れた教育活動につながる」という理由であった。FD活動を難しく考えるのではなく、どうすれば教育効果が上がるのかを問えば、案外単純だがとても重要な事に目が届くかもしれない。

FD担当者として、専門性を有しながらも簡単で分かりやすい活動でFDを支援するという意識とFD研修を行う上での細かな視点を実感できたという意味で、著者は本講座への参加をとても有益に思っている。

（文責 FD・ICT教育推進室 末本 哲雄）